

氏 名	新 庄 新 之 助 しん じょう しん の すけ
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 616 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	酪農発展の経営経済的研究 —愛知県酪農について—

論文調査委員 (主 査) 教 授 頼 平 教 授 上 村 恵 一 教 授 菊 地 泰 次

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、愛知県酪農の発展の態様とそのメカニズムを経営経済的観点から究明したものである。

愛知県酪農は、都市近郊酪農発展・山村酪農停滞段階から、都市近郊酪農現状維持・山村酪農発展段階を経て、将来、都市近郊酪農・山村酪農並列的発展段階へ推移しようとしている。

本論文はこの発展過程にそって、まず都市近郊酪農の発展のメカニズムとその特質を明らかにし、ついで都市近郊酪農と補完的に結合しながら独自の発展過程をたどってきた山村酪農について考察している。

第1章では、都市近郊酪農として典型的な発展過程をたどってきた知多酪農をとりあげて、それが高収益多頭飼育酪農経営から成る牛乳主産地として発展してきたのは、各発展段階ごとに性格を異にする先駆者的酪農家が現われ、採択者の酪農家を組織して、生産・流通規模の拡大を伴う様々な革新技術を採択してきたことによるものであることを実証している。

この革新機能を先駆的に担ってきた主体の歴史的系譜をみると、始祖的専業搾乳業者から育種型専業搾乳業者、ついで商業型専業搾乳業者および複合経営型酪農家へと移り、さらに搾乳業者と酪農家の長所を兼ね備えた大規模専業酪農家へと推移してきたことを明らかにしている。

知多酪農の発展は、その自然的・社会経済的立地条件に対して相対的有利性を示す酪農部門を採択したことにもよるが、それ以上に、農企業者能力を歴史的に蓄積し、それによって革新と組織化の利益を追求するという主体的条件の果たした役割が大きく、しかも農政担当機関や商業的乳業資本は脇役的存在にすぎなかったことを明らかにしている。

第2章では、知多酪農の中枢をなす半田酪農に焦点を絞り、それが歴史的系譜を異にし、また酪農部門の規模と発展段階とを異にする酪農家から成る地縁集団であるが、同時に組織化による大規模生産・流通の利益の実現をめざして、異なる階層の酪農家が主体的に結合した機能集団であることを論述している。

ついで彼等が地縁集団としての相互扶助精神に支えられ、低報酬で組織の管理機能を引き受ける先駆者的酪農家群の卓越したリーダーシップ、およびそれに意欲的に反応する多数の採択者的酪農家群との緊密

な協力によって一大牛乳主産地を形成し、各成員農家は、それによって実現される組織化利益を享受していることを実証している。

第3章では、知多半島の大半の酪農家が参加し、牛乳の加工・販売を直営している知多牛乳生産農協をとりあげて、それが商業的乳業資本に対抗して、農民資本による生産・加工・販売一貫体制の拠点になり、様々な組織化利益を組合員農家にもたらしてきたことを究明している。

知多牛乳生産農協は、組合員農家の生産した牛乳を一元集荷し、一部を加工・販売するとともに残余を大量・計画的に乳業資本に売却し、価格交渉力を強化してきたのであるが、その利益を主として手取乳価を高める形でもって農家に還元している。これに対して、同様に農民資本によって設立された名古屋牛乳株式会社は、その利益を配当の形で出資者に還元している。そこで両経営形態の特質を財務諸表の分析によって解明している。

第4章では、奥三河山村酪農の発展過程を、担い手である酪農経営の様々な発展型に着目しながら分析している。

山村酪農は、従来、都市近郊酪農に対して従属的に結合し、乳牛の育成過程を担当してきたのであるが、交通条件の改善と大規模草地改良事業に基づく県営・団体営の育成牧場や搾乳牧場の造成によって、発展のきっかけが与えられたのである。これらの県営・団体営牧場と地元の小農型酪農経営および転入してきた企業型牧場が補完的に結合し、さらに都市近郊酪農と補完的に結合しながら、その多頭飼育技術を選択的に採用して発展していくメカニズムを究明している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、愛知県酪農の発展の態様とそのメカニズムを古い文献・資料の収集と実態調査に基づいて実証的に究明したものである。いま本論文の評価すべき点をあげれば以下のとおりである。

(1) 酪農の発展は、立地条件の変動に対して受動的に酪農部門を適応させたことにもよるが、それ以上に自発的かつ継続的に革新技術を採用した主体的条件に強く依存し、その革新技術の担い手は、企業者能力の歴史的蓄積の系譜を異にする酪農家が緊密に協力し合う場合に、最も強力に経営を発展させることを実証している。

(2) 立地条件、酪農部門の規模と発展段階を異にする農家群を組織して、牛乳生産農協を拠点とした広域牛乳主産地を形成し、発展させていくためには、たえず革新技術を採用して組織化利益を生み出し、それを組合員農家に公正に分配し、また組合員農家間の構造的緊張を解消するために強力なリーダーシップを発揮しなければならないことを解明している。

(3) 組織化による革新技術採用の利益は、牛乳の加工・販売過程の直営と商業的乳業資本に対する取引力の強化過程において顕著であり、この組織化利益によって組合員農家の結束を強化してこそ、生産要素の共同調達と共同利用が円滑にすすむことを実証している。

(4) 同じく酪農家によって組織されながら、その組織形態を異にする知多牛乳生産農協と名古屋牛乳株式会社をとりあげ、比較分析によってその相異を明らかにし、それぞれの経営管理上の長短を指摘している。また経営内容の財務諸表分析によって、経営全体の安全性と収益性および各部門の損益を比較分析し

ている。この分析結果は、今後、牛乳の加工工場を直営しようとする他地域の酪農組合に対して重要な示唆を与えるものと思われる。

(5) 知多酪農は、他地域の都市近郊酪農と異なり、都市化によって停滞することなく、着実に頭数規模の拡大と従業者1人当り純収益の増大を続けてきたが、今後は、山村酪農との補完的・協調的結合によって、両者の併進的発展の可能性が大きいことを明示している。

以上のように本論文は、農業経営および特定産業部門の動態分析に対して、新しく分析モデルを考案し、これを愛知県酪農の発展過程に適用して、幾つかの新知見を得たものであり、農業経営学の研究ならびに酪農業の実際面に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。